HAL
open science

張超 * 著「禅林筆記と大慧派の禅僧仲温暁瑩」**

Chao Zhang

To cite this version:

Chao Zhang. 張超 * 著「禅林筆記と大慧派の禅僧仲温暁瑩」**. International Zen Studies , 2018, 2, pp.199-223. ⟨hal-03210169⟩

HAL Id: hal-03210169

https://hal.science/hal-03210169v1

Submitted on 27 Apr 2021

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

張超*著
「禅林筆記と大慧派の禅僧仲温暁瑩」**

伊　吹　　敦***訳

一

一般に禅林筆記（「宗門随筆」「禅林軼事小説」とも呼ばれている）は中国の北宋代の臨済宗の詩僧で歴史家でもあった恵洪（徳洪、1071-1128）の『林間録』に始まると考えられている。この伝統は、南宋時代に成熟し、少なくとも明代まで続いた（作品は下の「禅林筆記列表」を参照[1]）。これらの著作は全て臨済宗、特に大慧派の僧の編集になるもので[2]、どれも 100 ～ 200 箇条から成っており、各箇条は、平均 300 ～ 400 字と比較的短く、主として、10 ～ 14 世紀の間の幾千もの禅林の僧俗の逸話を記しており、大量の禅問答や詩文・偈頌を含み、また、語彙に関する考証、経典の教義の説明、神秘的な出来事、宗教に関する政治的な事件なども記されている。これらの中国の僧侶の作品は、中国と日本の禅林の交流の中で日本に持ち込まれ、両国で今日まで伝えられ、多くの刊本、写本、注釈本が残されており、一大文献群を形成している。これらの筆記の撰者、序跋者、注釈者の中には、恵洪、宗杲（1089-1163、妙喜・仏日・普覚・大慧等と号す。以下、大慧と呼ぶ）、義堂周信（1310-81）、無著道忠（1653-1745）、白隠慧鶴（1685-1768）のような大きな影響力を持った僧もいたし、林羅山（1583-1657）のような一代の大学者もいた。いくつかの作品は中

*日本学術振興会外国人特別研究員、駒澤大学研究員
**原題「禪林筆記與大慧派禪僧仲温曉瑩」
***東洋大学文学部教授・「国際禅研究プロジェクト」研究代表者

国歴代の仏教書の優品として大蔵経や四庫全書などの権威ある叢書にも収められている[3]。

禅宗筆記一覧

1．林間録	恵洪	1107 年序
2．羅湖野録	暁瑩	1155 年序
3．大慧宗門武庫	大慧	1186 年序
4．叢林公論	恵彬	1189 年序
5．感山雲臥紀譚	暁瑩	1191-1205 年の間
6．叢林盛事	道融	1197 年序
7．人天宝鑑	曇秀	1230 年序
8．枯崖漫録	圓悟	1263 年跋
9．山菴雑録	無慍	1376 年序

しかし、十二世紀以来、中日両国の禅林の内外で広く注目を集めたこの文学的遺産は、これまで世界の学界で注目されることはなかった[4]。個別の作品に対して校点や注記を付す、あるいはその内容を深く理解しようとするような研究も、文献群としての角度から全作品を概観するような研究もほとんど見られなかったのである。その理由は様々である。先ず、禅林筆記は典型的な宋元代の禅宗用語で書かれており、宗門内の典拠と甚だしく理解しがたい「活句」に満ちており、これが少なからず理解の妨げになっている。次に、筆記に載せられる内容が多様で、禅宗の歴史や教義、教団の組織や儀礼、美学思想などの幅広い領域にわたり、また、宗教内外の非常に多くの歴史的人物や事件にまで及んでいるため、読解には多くの学問分野の総合的視点が必要で、これもまた研究に困難さを加えるものである。最後に、これが最も重要な点だと思われが、中国の文人の筆記小説が、長い間、古典文学の本流の影に置かれて「いい加減な受け売り話」（道聴塗説）、あるいは、「水準以下」（不入流）の怪しげな資料と見做されて捨て置かれたのと同様に、禅研究において、灯史、語録、公案集などの「中心的」な文献に対して、禅林筆記も往々にしてその「辺縁的」な性格のために軽視されてきたのである。

禅林筆記という文献群の特色として先ず挙げるべきは、文献の形式が断片的であるという点である。一般的な仏教史書は、例えば、南宋の志磐の『仏祖統紀』は紀伝体、南宋の本覚の『釈氏通鑑』は編年体、「高僧伝」系は「十科」、禅宗灯史は系譜に沿った配列というように、一定の原則に沿って編集されている。しかし、禅林筆記の各箇条は、勝手気ままに並べられており、読む上で非常に不便である。実際のところ、多くの撰者は序跋の中で、本書に載せられているものは、個人的な交際や記憶、あるいは毎日書き置いたメモなどに基づくもの、つまり「談笑の間に得たもので、意図したものではない」(「得於談笑而非出於勉強」)[5]と述べているのである。要するに、これらの文献は事前の構想に沿って書かれたものではなく、断片的な情報が自然に集まったものなのだ。最初、それらは禅宗の歴史家が正史を編纂するために建てた「資料を貯える倉庫」であったのかも知れないが、その後、宋代に文人の筆記が大いに発展したために、独立した文体へと変化していったのである。

次に挙げるべきは、禅林筆記が極めて豊富な史料を含んでおり、他の仏教史書と補い合う点が多いということである。筆記が書かれた目的の一つは叢林であまり知られていない人物や事件について書き記して人に伝えるところにあった。このため筆記の作者は、往々にして性格の異なる様々な素材(行状、個人の経歴、個人的な会話、一般人への説法、金石銘文など)を用いることで初公開の独自史料を多く提供しており、これらの情報は時として禅宗の正史の内容を補ってくれるのである。そのため、禅林筆記は、この時期の禅宗に対する我々の認識の盲点を突いたり、禅宗の正史が口をつぐむような敏感な話題について考えるのに役に立つのである。撰者によっては、更に一歩を進めて、筆記という主観的性格の強い著述形式を利用して、意図的に他の仏教史書や禅宗史書を補足、修正、批判して、文献間の対話を促し、同一人物、或いは同一事件についての多角的な情報を読者に提供したり、文献の背後にある歴史記述理念を指摘したりもしている。

最後に、人物描写や人物批評も禅林筆記の大きな特色である。最初の筆記、『林間録』の書名は、作者と「林間の勝士との気のあった清談」（林間勝士抵掌清談）の経験に由来すると述べている[6]。「魏晋の清談」を体現する文人筆記である『世説新語』（5 世紀前半）と、それによって形成された「世説体」の伝統が、恵洪らの禅門の撰者に与えた影響は書名に限られるものではなかったようである。『世説新語』と同様に、大部分の禅林筆記の各箇条は、一人、あるいは複数の人物をめぐって叙述されている。ある人たちが多くの筆記、あるいは同一作品の多くの箇条に何度も出てくるため、一般の禅籍の中では孤立した存在のように見える人々を相互に結びつけることができ、当時の禅宗の社交ネットワークや禅宗全体の動向を浮かび上がらせている。また、禅林筆記も時間に沿ってその全生涯を紹介しようとするものではなく、小から大を見る、つまり、個々の典型的な事件や言葉を通して人物の精神的境地や性格的特徴、或いは学識を生き生きと描いていて、文学性や審美的な価値を有し、読者に深い印象を与えるものとなっている。更に、禅林筆記では「世説体」のような人物批評項目はまだ確立してはいないが、修行や道徳に対する批評眼が強烈であることに変わりはない。作者によっては各箇条の最後に歴代の正史の「論賛」のような評語を付しており、「宗教を支える」（輔宗教）助けとなる「刑罰の主宰者」（典刑）、つまり、禅宗の理想的人物像[7]を推奨するよう努めており、読者に話題を提供するのと同時に、従うべき行為の規範を打ち立てている。つまり、『世説新語』の「魏晋の風格」に対して、禅林筆記が造型したものは、「宋代における宗門の風格」を示す群像であったと言えるであろう。

ある文献群が生まれるということ自体、当時の知識人たちの生活の反映であるから、禅林筆記は、教団のエリートたちが、宋代禅宗のイデオロギーと文人筆記の発展という二つの影響のもとで生み出したものなのである。宋代に完全に制度化された禅宗は、詳細に規定された清規、系統づけられた教義だけでなく、宋以前ならびに当代の宗門の歴史を構築しようと

いう強烈な欲求を生み出した。そして、宋代の禅宗教団の文人化の進展によって、歴史的記述を行いうる表現力と歴史意識を持つ僧侶が時とともに増加していった[8]。そのため、晩唐・五代の灯史形式を更に発展させるとともに[9]、宗門では、新しい歴史記述の方式を生み出して、日増しに増え、また様々な性格を持つ史料を整理していった。宋代に確立された文人筆記は、正しく禅宗のこの要求に答えるものだったのである。文人筆記は、数量の点で宋代だけでそれ以前の全てを超えて500部以上に達しただけでなく、内容も多様なものとなり、更に、筆記文そのものの構成もこの頃から固定化していった。これらは、従来、お粗末で人前に出せない辺縁的な著作と見られてきたが、形式が自由で主観的意見を述べるのに便利であったため、北宋の中期以降、欧陽修（1007-72）や蘇軾（1037-1101）らの一流の文人にも注目されて流行し始めた[10]。禅林筆記は宗教的史伝に世俗的文学の外套を羽織らせて成立した宋代禅宗の新しい文体の一つで、宗門のアイデンティティーと禅宗史に関する通念を構築しただけでなく、士大夫の読書の習慣にも合致したため、仏教を知識階級全体に広めるという点で大いに役立った。

二

以下において、一人の禅林筆記の作者、即ち、臨済宗大慧派の僧、暁瑩（字は仲温、雲臥菴主と号した）を例に、二つの筆記作品を具体的に紹介しよう。先ほど挙げた筆記の一覧から分かるように、暁瑩は唯一人、二部の筆記を残した人である。恵洪の『林間録』は筆記文献の嚆矢であるが、実際には、後代への影響は暁瑩の作品の方が大きい。また、後代の二人の撰者が序跋の中で暁瑩の筆記に啓発されて撰述したと述べ、彼が確立した撰述形式を意識的に継承しているし[11]、確かに後代の作品は内容と風格の点で暁瑩の筆記に近い[12]。このため、暁瑩は禅林筆記の事実上の確立者と言ってよいのである。

南宋の初期に生きたこの禅僧の生涯に関する伝世文献中の史料は非常に限られている。明代の『続伝灯録』（1375-76）が、大慧の法嗣の中に彼の名を連ねた最初で（94 人の法嗣中の 54 番目）[13]、彼の伝記の出現は、『増集続伝灯録』（1417 年）と『大明高僧伝』（1617 年）まで待たねばならないし、その内容も極めて簡単なものである[14]。これ以外で知りうるのは、大慧下二世の居簡（1164-1246）が、暁瑩ともう一人別の臨済宗楊岐派の禅師のために書いた祭文、「祭羅湖雲臥菴主瑩仲温・雪堂老宿聡首座」[15]、ならびに暁瑩が著作の中で述べている些細な記述のみである（これについては下で言及する）。これらの極めて限られた資料から、我々は二つの結論を導き出すことができる。第一に、大慧との師承は宗門内で認められていたけれども、暁瑩の宗教体験と業績は決して際立ったものではなかったようだということである。彼の伝記資料には語録などの教義教学的な内容は見られず、彼には正式な法嗣もいなかったのである。第二に、禅宗の系譜に入れられるエリート僧ではあったが、禅宗教団にとっての暁瑩の存在意義は、文章、特にその筆記にあり、禅宗の中では、学問僧、詩僧、あるいは隠者として記憶されていたのである。

上に述べた伝記資料を基礎に、他の各種文献を結びつけることで暁瑩の生涯の大まかな輪郭を復元してみよう。先ず、彼の生没年については、今のところどの一次資料にも記載はない。彼の二番目の筆記、『感山雲臥紀談』（以下、『感』と略称）に附された長文の書簡、「雲臥菴主書」（以下、「書」と略称）には、「私は、いま六十八歳」（愚行年六十有八）という記述があり[16]、ここから多くの学者は「書」の撰述年代をもとに暁瑩の生年を推測している。例えば、柳田聖山は「禅籍解題」で、この書簡を 1183 年以降のものと見て、暁瑩が 1116 年に生まれたと推測しており[17]、椎名宏雄はこの書簡を 1178 年以降のものとし、暁瑩が政和年間（1111-20）に生まれ、淳熙の末年（1189）に没したという結論を導き出している[18]。しかし筆者は、「書」の成立は更に遅く、おおよそ 1191-1205 年の間であって、暁瑩の生年は 1122 年以降であろうと考えている。以下、その理由を

述べよう。

先ず、暁瑩は「書」の末尾で、同門の宗演（この書簡の受け取り手）が福州の秀峰寺の招請を辞退したと聞いたと書いている[19]。この招請は趙汝愚（1140-96）が福建の軍帥であった時期（1182-85）に宗演に対して行ったものであるから[20]、この書簡が書かれたのは少なくとも 1182 年以降である。また、暁瑩が「書」の中で何度も『感』に言及しているから、「書」の成立が『感』より早いはずがない。では、『感』はいつ完成したのか。この問題については、次のようないくつかの見解がある。

1. 元代の『仏祖歴代通載』（1341 年）は、1155 年とする[21]。しかし、これは『感』の中の多くの逸話より早いので誤りである。あるいは編者が暁瑩の最初の筆記、『羅湖野録』（以下、『羅』と略称）の自序の年をそのまま流用したのかもしれない。この見解は小野玄妙の『仏書解説大辞典』で採用されている[22]。
2. 柳田聖山は、本書の成立を 1178 年頃とするが、理由を述べていない[23]。椎名宏雄と石井修道はこの説を採用している[24]。
3. 陳士強は、本書中で時間的に最も遅い記載が「御註円覚経」の条で、宋の孝宗（趙**眘**、1162-89 在位）がその主人公であることを指摘した。そして、その部分で趙**眘**の廟号である「孝宗」が用いられているので、本書は 1190 年以降の成立であるとし、更に、本書の最終的な成立時期を寧宗の嘉定末年（1224）であると論じた[25]。

廟号を根拠とするなら、趙**眘**が「孝宗」の号を得たのは、1194 年に世を去って後のことである[26]。しかし、草稿の中の帝王の呼称は、通常、後代に刊行される際に書き換えられ、刊行時点のものが用いられるから、もっと直接的な論拠を探さねばならないであろう。実は、陳教授が指摘した「御註円覚経」の条の末尾には、御註の『円覚経』を賜った径山の伝法僧、宝印への言及があって「示寂して慧辨禅師と謚した」と述べられている[27]。『五灯会元』の記載によると、臨済宗楊岐派の克勤（1063-1135、号は圓悟。以下、圓悟と略称）下二世の宝印禅師は、「紹熙元年十二月七日」、

即ち、1191 年 1 月 4 日に世を去っている[28]。これによって『感』の成立は 1191 年以降となる。更に、『大慧普覚禅師年譜』（以下、『大慧年譜』と略称）の末尾に編者の宗演が開禧乙丑（1205）に書いた跋文があり、その中で、暁瑩が「書」の中で行った誤りの指摘に基づいて、越州興善寺の僧、祖詠が作った『大慧年譜』に修訂を加えたことを強調している[29]。従って、「書」の撰述時期はこの年以前でなくてはならない。上に述べたところを総合すると、「書」は、1191-1205 年の間のある時期に成立したと考えることができる。暁瑩が没した時期については、『増集続伝灯録』の中の「吉州青原信庵唯禋禅師」伝が、紹熙三年（1192）に大慧下二世の唯禋が亡くなった後、暁瑩が彼の法系上の甥で親友でもあったこの僧のために行状を書いたことに言及している[30]。従って、この年には彼はまだ生存中であったと考えることができる。

暁瑩の宗教家としての人生で起きた主な事件を挙げると以下のようになる。洪州（今の江西省の南昌）に生まれ、1141-1155 年の間、大慧が衡や梅（今の湖南省衡陽と広東省の梅州）に貶逐されていた時、大慧の愛弟子となり、梅州の報恩寺で堂司の職に任じていた時、大慧が説法の時に使っていた有名な法具、「竹篦」を贈られた。長期にわたる辺地での流謫の後、1156 年に大慧は遂に僧籍を回復し、次の年には 12000 人もの僧が集まる明州の阿育王寺（今の浙江省寧波）に出世した。苦しみの日々が終わり、幸せな日々がやって来たというのに、暁瑩は師と行動を共にせず、ただ一人、洪州の東南 60 里にある羅湖地区（今の江西省撫州）にやって来て、「門を閉ざして道をふさぎ、世人との往来を絶った」（杜門卻掃，不與世接）[31]。しかし、この隠居生活の間も、彼は大慧教団と接触を保ったのみでなく、最初の筆記作品である『羅』を撰述し、師友や北宋禅林に関わる伝聞や逸話に深く思いを馳せていた。1163 年に大慧が入寂したが、その前後に暁瑩は径山能仁寺（今の浙江省余杭）に行き、葬儀に携わり、掌記を担当した。その後、彼は、1171 年に城山（不明）に移り、そこに房舎を建て、それを士大夫の孫覿（1081-1169）の書額によって「雲臥菴」と

名づけ、自ら「雲臥菴主」と名乗るようになった。「山頂は高く寒いので、老人が住むには適さない」（山頂高寒不適老者居住）[32] ため、1178 年に弟子とともに曲江の感山海慧寺（今の江西省豊城）へと移った。この寺での生活環境は極めて厳しく、知人らの出資によって小さな輪蔵を作り、それによって何とか生計を維持していた。このような生活は 12 世紀末か 13 世紀初めと見られる暁瑩の逝去の時まで続いたと考えられる。彼の二番目の筆記、『感』は、この晩年に書かれたものなのである。

筆記以外にも暁瑩は、当時の禅門で高僧のために独立した伝記を書くことが流行していたので、それに倣って少なくとも「大慧正続伝」「無垢聞道伝」「無著投機伝」の 3 篇を撰述し、それぞれ師匠の大慧、同門の居士、張九成（1092-1159）、同門の尼僧、妙総（1095-1170）の禅門における経歴を叙述した。それらは宋代の筆記の一つ、『人天宝鑑』の引用によって今日に伝えられており、他の文献には見られない貴重な情報を提供してくれている [33]。更に暁瑩は、当時の他の仏教史書の撰述にも注目し、祖琇が撰述した仏教通史、『隆興仏運統紀』の紀年の誤りに満足できず、自ら「釈迦文仏住世図」一幅を制作し、ブッダ＝釈迦牟尼の一生を図像と年譜で表現したが、これは斬新な仏教史記述方式であると言えるだろう [34]。詩学の方面では、『四庫全書提要』が暁瑩を「よく詩を理解している」（頗解吟詠）と評しており [35]、また、南宋の出版者、陳起が『聖宋高僧詩選』の中にその作品を収めたが、完全な作品として残されているものとしては、「南昌道中」と「書」の中の自作の偈頌 4 首があるに過ぎない [36]。釈紹嵩（1194-?）の『亜愚江浙紀行集句詩』の中には暁瑩の詩の断片、130 句以上が収められているから、非常に盛んに詩作を行ったことが分かる [37]。

以上、その生涯の概要を見たが、これによって、隠居の前後に関係なく、大慧及び多数の僧俗の弟子から成る禅宗の社交ネットワークが暁瑩の生活と創作の中心となっていたことが分かる。ネットワークの構成員は、彼の宗教活動に直接関わっただけでなく、彼の文字での実践（筆記、伝記の創作、書簡）のモチーフでもあったのです。

暁瑩が嗣法した師匠で宋代禅宗の領袖の一人であった大慧が暁瑩に与えた影響は長期的、全面的、かつ深刻なものであった。彼の二部の筆記の中で大慧に関わる箇条が最も多く、また、少なからぬ記事の中で、その情報が大慧本人によるものであることを強調しているし、「書」では、『大慧年譜』の誤りの修正に努めてもいる。大慧以外に、「書」の受取人である同門の宗演もまた暁瑩が敬慕した友人の一人であった。現行本『大慧年譜』の編集者である宗演は、大慧に参じて開悟した後、径山で師を助けて説法を行い、暁瑩から「辛辣なやり口、巨大な鉗鎚」（辣手段、大鉗鎚）[38] と褒め称えられている。宗演もまた深く大慧の影響を受け、何人かの同門とともに 30 巻の『大慧広録』を編集しているし、大慧が世を去った後は、師の住した径山を一歩も離れまいと決意し、最終的には晩年に常州の華蔵寺（今の江蘇省無錫）に出世したが、それまで何度も住持の招請を固辞していたのである [39]。彼の語録は 1238 年に刊行された『続刊古尊宿語要』に早くも編入されて世に広まったし [40]、多くの頌古が『禅宗頌古聯珠通集』『宗鑑法林』等の書物に残されている。これらの法語は、僧侶の禅的な修養を反映しており、また、文字を駆使する素晴らしい能力を示している。宗演は、恐らく、1205 年以降、間もなく世を去ったが、四人の正式な法嗣を残している [41]。もう一人、暁瑩と親しかった大慧派の人物に、上に挙げた尼僧、妙総がある。男性の禅師であった暁瑩は、この女性に自分の著作『羅』の序文を依頼しただけでなく、彼女のために単独の伝記を書いたが、これは仏教史全体を見渡しても極めて稀なことと言え、その尊敬の一端を窺うことができる [42]。妙総は官僚の家の出身で、北宋の宰相、蘇頌（1021-1101）の孫娘に当る。結婚した後、仏門に帰依し、各地の禅僧に師事して曹洞宗の清了（1088-1151）を含む多くの名僧の印可を受けた。しかし、彼女は常に自身の境地に疑念を抱き、大慧の許可を得た上でわざわざ径山に赴き、大慧に従って修行すること二十余年を経て大慧の主要な法嗣の一人となった。その犀利で潑剌とした禅風、特に女性が父権的な宗門のあり方に大胆に立ち向かう姿は、男性の禅師たちの尊敬と称賛の的で

あった[43]。径山を離れた後、妙総は、1162 年、68 才の時、正式に剃髪を行い、次の年、平江の資寿寺（今の江蘇省蘇州）に出世したが、間もなく引退して故郷に帰り、1170 年に世を去った。正式な法嗣についての記載はないが、妙総の言葉と伝記は多くの仏教文献に記録されている[44]。暁瑩や宗演と同様、彼女も文学的才能に富み、その詩は清代の『宋詩紀事』に収められている[45]。

最後に暁瑩の「方外の友」である孫覿に言及しておかなくてはならない。暁瑩は、1171 年以降、孫覿が生前に贈ってくれた「雲臥」の二字で自分の庵を命名し、また、「雲臥菴主」と自称し、孫覿を「自分の理解者」（知予者）[46] と呼んでいるので、孫覿が彼にとって特別な存在であったことが分かる。鴻慶居士、孫覿の官僚生活は悪名高いもので、無節操のために拘束、罷免され、同輩から排斥されるということもしばしばで、『宋史』に伝記はない[47]。ただ、文章については当代を代表する人物で、南宋の初期には、汪藻（1079-1154）、洪邁（1123-1202）、周必大（1126-1204）と名を等しくし[48]、蘇軾の「亡骸（なきがら）」（遺體）[49] と称えられたほどであった。孫覿の仏教への心酔は、その文集から容易に看て取ることができる。つまり、仏教活動と関係する「請疏」、禅師の「塔銘」や「真賛」が多数含まれており、特に大慧の師であった圓悟や雲門宗の智訥（1079-1158）との親密な往来を窺うことができる[50]。この外、孫覿の従子、兵部郎中の孫大雅（活動期は 1133-65）もまた大慧門下の「真剣に道を求め、確かに悟りを得た」(恪誠扣道、親有契證) 士大夫の一人であった[51]。暁瑩が孫覿と相い知ったのは、恐らく、孫家と克勤 = 大慧一派の関係を通じてであろう。晩年の孫覿は、紹興年間の半ば頃から政治から遠ざかるようになり、太湖に隠居して逝去した。暁瑩が遭ったときの彼は、恐らく一人の純粋な文人であり、彼の仏教への信奉と「年老いていよいよ研ぎ澄まされた」（晩而愈精）文学性は、自ずと二人の友情を育んだであろう[52]。『感』での自身についての叙述や「書」での孫覿への言及以外にも、暁瑩は筆記の中で彼の予言についての逸話を記している[53]。

三

暁瑩の生涯、著述、宗教的環境、交友関係等について、おおよその理解が得られたと思うので、以下においては、彼の二つの代表作である『羅』と『感』の構成と内容上の特色について簡単に紹介しよう。

二つの作品の成立時期は、先ほど述べたように、『羅』が 1155 年前後、『感』は 12 世紀と 13 世紀の境目頃である。『羅』は中日両国で流布し、20 種に近い刊本、林羅山書写本を含む日本の写本が 3 本、日本で書かれた自筆注釈本が少なくとも 5 本ある。中国では明代に嘉興蔵に入蔵し、清代には『林間録』とともに計 13 部の著作が収められた『四庫全書』子部釈家類に列ねられ、日本では近代になって『大日本続蔵経』に編入された。椎名宏雄によると、この作品は中国と日本とで相互に無関係に流布したということである。しかし、『感』は宋代に刊行された後、中国本土では伝承を絶ち、現在の諸本は皆な日本伝本に由来するもので、10 種近い刊本と 2 種の写本がある。江戸時代、無著道忠は両書に共通する記事について『雲臥紀談対校』1 巻を著し、元珍は『感山雲臥紀談輯略』4 巻を著して筆記や末尾に附載された「書」に対して非常に詳細な注解を施している。本書も『大日本続蔵経』に収められている[54]。

『羅』（流布本は続蔵本）は上下 2 巻、97 箇条から構成されており、冒頭に暁瑩による 1155 年の自序があり、末尾に尼僧妙総による 1160 年の跋が附されている[55]。筆者は本書を読んでいて、『雪堂行和尚拾遺録』(T.1998b) と内容的にかなりの重複があることに気づいた。『雪堂行和尚拾遺録』は「宗門武庫拾遺」とも呼ばれ、これまでずっと大慧の同輩で臨済宗楊岐派の道行（1089-1151）の作品と見做され、『大慧宗門武庫』に附されて一緒に流布してきたが、石井修道はこれを禅林筆記の一つと認定した[56]。本書の全体は 37 箇条から成り、その中で『羅』と全部、あるいは部分的に重なるものは 16 箇条に及び、また、『林間録』や『感』と重なるものがそれぞれ 1 箇条ある。更に、本書中の 5 箇条は道行本人の言行を三人称の形で

書き記している。以上の諸点から判断すると、『雪堂行和尚拾遺録』は道行の著作ではありえず、その具体的な性格については、更なる研究が必要である。『感』（岩瀬文庫所蔵五山版）は、上下 2 巻、96 箇条から構成されており、冒頭には暁瑩の自序、末尾には 30000 字の「書」を附しており、主な内容は祖詠が編集した『大慧年譜』と当時の禅宗史伝の誤りを正そうとするものである。江戸時代の『感山雲臥紀談輯略』以降、各箇条の筆記には題名が附され、それに基づく目録が巻頭に附されている。

伝記資料という視点から見ると、両書の各項目の主人公は、ほとんど 11 世紀初頭から 12 世紀末までの凡そ 200 年間に生存した人々である。仏教教団以外に、宋代の著名な士大夫や天子を初めとする在俗の仏教信者たちも重要な記載の対象となっており、関係する箇条は両著作の四分の一を超えている。僧尼の中では臨済宗が最も多く、その次が雲門宗と曹洞宗のわずか 5 人、法眼宗は 2 人、潙仰宗は 1 人である。臨済宗の中心は黄龍派と楊岐派で、数の点ではほぼ拮抗している。黄龍派の禅師の中で記載が最も多いのは慧南（1002-69）下二世の悟新（1043-1116）の 12 箇条と惟清（1117 年卒）の 9 箇条である。この二人は、北宋後期の臨済宗の傑物で、特に前者の伝記は「書」で問題とされている。楊岐派では、大慧本人の言行に関する箇条が最も多く、両著作の内容のおおよそ六分の一を占めている。その次が楊岐派の「三仏」中の仏果圓悟の 12 箇条と仏眼清遠（1067-1120）の 8 箇条である。この外、大慧直系の法嗣を主要人物とする箇条が 16 あり、その多くは、薦福悟本、枯木祖元、書記修仰、舟峰慶老（1143 年卒）、祖麟、大悲閑、信無言などの伝記資料の少ない弟子の紹介である。両著作に述べられている人物や事件についての詳細は、基本的には他の同時代資料には見えないものであるから、北宋期の黄龍派や両宋交代期の楊岐や大慧の教団を研究する場合にも、宋代の士大夫や皇族の個人的な宗教的実践について考える場合にも、この二つの筆記は、極めて高い資料価値を持っており、正史の伝記を補うという点で重要である。

宗教学の視点から見ると、二つの著作は、当時の禅宗のあり方について

多角的な情報を教えてくれる。例えば、前に書いた論文「禅林筆記と宋代中国仏教における法系の構築」の中で、私は、二つの著作を含む宋代の禅林筆記中の、法系の混乱に関する一連の記載を系統的に調査した結果、これらの筆記資料に示される伝法の状況が、灯史等の禅宗の公式資料に説かれるものと大いに異なることを発見した。もし後者が、師と弟子とが一対一の関係で結ばれ、また、師と弟子の精神的な共鳴により、師の権威を尊ぶ理想的な伝法であるとするなら、筆記はもっと現実的な一面、すなわち、禅宗の師承関係の多様性、争いや世俗的な面を示しているのである。この師承の矛盾は、一つには宋代の禅宗の師承制度において師と修行者との関係が対等ではなかったことに由来する。つまり、修行者は自分の法系を選ぶに当って、師を圧倒する発言権を持っていたのである。もう一つは、宋代の官僚の党派と同様、宋代の禅僧たちは高い流動性を持っていたので、それが師弟間の関係が複雑になった一つの原因であったようである[57]。

法系の問題以外にも、女性習禅者の地位が宋代に高まったということも暁瑩の筆記の注目すべき点であるから、最後にこれについて述べておこう。禅宗は、教義のうえでは衆生が皆な成仏できるということを強調するが、実際には、宗門に認められた女性は極めて少数である。例えば、宋代の灯史の集成とも言える『五灯会元』（1252）は、宋代の灯史の中で女性の数が最も多いが、20 巻 2000 人ほどにもなる禅宗のエリートたちの中で女性の法嗣は 21 人に過ぎず、その内、14 人は宋代の人で、9 人が尼僧、5 人が在家である[58]。暁瑩の二つの筆記の 193 箇条の中に 6 人の女性の嗣法者の修行に関する逸話があるが、この比率は明らかに同時代の他の史伝より高いと言える。この 6 人の女性の中で、4 人は南宋時代に宗門の系譜に入れられた人で、2 人は明代なってからである。6 人のうち、5 人は臨済宗で 1 人は曹洞宗、5 人は尼僧で 1 人は在家である。そしてその在家とは「兪道婆」と呼ばれた金陵（今の江蘇省南京）の小売りで、禅宗史全体を見渡しても、社会の底辺の女性で「法嗣」として灯史に載せられた嚆矢で

ある。ここで尼僧が置かれた状況について簡単に述べておこう[59]。以下、先ず 5 人の尼僧の生涯について大体の紹介をした上で私見を述べることとする。

1. 空室道人、智通（1124 年卒）は、法名を惟久と言い、黄龍派の惟清が「空室道人」という号を与えた叢林の有名人である。直龍図閣の范珣の娘で蘇頌の孫の蘇悌に嫁し、従兄が豫章の分寧（今の江西省修水）の長官になったので雲巌寺で黄龍派の悟新禅師に参じて法を得た。政和年間（1111-18）に金陵にいた際、当時、蔣山に住持した圓悟・清遠の両禅師に称賛された。後、姑蘇の西竺院（今の江蘇省蘇州）で剃髪して尼僧となり、宣和六年、結跏趺坐して亡くなった。『羅』は惟久について記載した最古の資料であり、その内容は後に初めて彼女を法系に入れた『嘉泰普灯録』と大いに異なっている[60]。
2. 浄智大師、慧光（1124-26 年卒）は、歴史家の范祖禹（1041-98）の姪で、曹洞宗の法成（1071-1128）に嗣法し、宣和三年（1121）に東京開封の妙慧尼寺に勅住した。徽宗の時代（1100-26）に朝廷から法衣を賜わり、御前で説法を行って聞くものを敬服させた。世を去って後、中書舎人の韓駒（1135 年卒）がその塔銘を撰述した。『感』は慧光について記した最古の資料で、その内容は『嘉泰普灯録』の慧光伝よりかなり詳しい[61]。
3. 曉瑩の同門三人、即ち大慧の法嗣の無際道人、慧照（1177 年卒）、超宗道人、普覚、ならびに関西尼、真如。慧照と普覚は相互に知り合いで、それぞれ兵部侍郎張淵道の娘、兵部・戸部侍郎劉岑（1087-1167）の猶子の母である。二人が大慧の弟子となったのは偶然ではなく、無際道人の落髪の師は妙総であって、劉岑も大慧派の著名な居士、「解空居士」であった[62]。二人は径山で一緒に学んだが、その後、無際は出家して師の妙総の資寿寺の法席を承け継いだ。乾道七年（1171）、臨平の明因寺（今の浙江省杭州）に移り、淳熙四年に世を去った。荼毘の際には舎利などの神異が見られ、一時的に柩を置いた場所からは泉が湧き出たという[63]。最後に真如について言えば、もともと天子の行動を記録する役職

の女官、内夫人であったが、仏教崇拝者の徽宗の貴妃、喬氏に侍したため、剃髪出家して全国各地の名刹を参拝した。小谿の雲門寺（今の福建省泉州）で大慧に教えを請い、大慧に激賞された[64]。『大慧年譜』によると、紹興十五年（1145）、大慧が彼女のために説法を行い、次の年、真如に請われて「補陀大士讃」「文殊問疾讃」という二つの文を書いた[65]。三人の中で無際道人は南宋時代に書かれた『大慧年譜』の中で大慧の法嗣とされているが、法嗣としての普覚と真如の地位は明代の『続伝灯録』で確立されたものである[66]。筆記を除けば、三人の伝記資料は、その他の宋代の禅籍には全く見ることができない。

二つの筆記は、これら同時代の尼僧たちの悟りの境地を高く評価しており、単に円悟や大慧などの一代の宗師が「女性の中の真の大丈夫である」（女流中真大丈夫）と力説したことを強調しただけでなく[67]、女性の禅師たちが男性の禅師と同じように国家から厚遇されたことを記している。倫理や美学的側面から見ると、「自信」「大度」「果断」「聡慧」「正直」等は、通常、中国古代の男性の品格を表わすために用いられる言葉であるが、筆記の作者は全く惜しげもなくこれらの言葉を女性たちに用いているのである。百年以上前の『景徳伝灯録』の曖昧な女性習禅者の描写に較べれば、女性の地位が向上したことは疑えない[68]。筆記中の 5 人の尼僧以外に、暁瑩が尼妙総を極めて高く評価したことは既に指摘した。こうした女性尊重は、あるいはその師、大慧の影響なのかも知れない。『聯灯会要』（1183）に列ねられる大慧の法嗣 9 人の中に 2 人の尼僧、妙総と妙道がいるし、『嘉泰普灯録』（1204）では、もう一人、俗人の女性の法嗣、秦国夫人計妙真（1156 年卒）が加わっている[69]。『年譜』に記される門人の一覧に依れば、更に無際道人を加えることができる。このように大慧に 4 人もの女性の法嗣がいたことが宋代の禅宗で公認されていたのであって、これは宋代の禅僧では最多である。更に大慧の著作全体を見ると、教えを受けた女性はもっと多く、総計 20 人近くになる[70]。興味深いのは、大慧の師、圓悟も女性参禅者を大切にしていたということであって、法嗣には 3 人の女性

がいる[71]。

しかし、これらの女性は寺院の住持にはなっても、正式に法を伝えて法系を残したという記載は見られないという点は注意が必要である。これからすれば、彼女らの禅宗の系譜上の地位は、同じく南宋以降に輩出した宋代の居士の法嗣と同様のもので、受動的に法を受けても、僧侶のように法系を伝えることはできなかった。つまり、これらの尼僧の宗教的な地位は、僧侶には全く及ばないものだったのである。筆記中の尼僧の姿について言えば、彼女らは往々にして優しさとか淑やかさとかいった中国古代の典型的な女性の美徳を欠き、それが強硬な態度や強靱な意志によって置き換えられている。また、一部の女性は男性の禅師が用いる言葉を積極的に取り入れ[72]、男性の禅師以上に清規や社会倫理に背くような行動をことさら行って、あらゆる束縛を離れた英雄であるという気概を表現しようとしている。例えば、筆記の記載によると、尼慧光は、男性の禅師と一緒に宮中で説法した時に、自らを男性的な謙譲語である「山僧」と呼び、自分には説くべき法などないとして、「法衣で頭を覆った」（以法衣覆頂）後に下座したとされている[73]。このような「中性化」、あるいは「男性化」は、実は、宋代の禅門における男女間の不平等を示すもので、女性修行者は伝統的女性像を取り去って男性化しないかぎり、究極の境地には至れないということを暗に示すものである。更に、これらの尼僧の社会的背景を考えてみると、彼女らの出自が全て宋代社会の頂点に属する人々であったことが分かる。政治権力にますます取り込まれつつあった当時の禅宗教団では、禅僧たちは官寺への出世の機会を得ようと高級官僚や中堅の官僚との関係を強めようとする一方、限られた数の宮廷や官僚の家の女性の尊崇を得ることで彼女らの背後にある家族や社会権力のネットワークの支持を得ようとしていた。そういうわけで、これらの女性たちが宋代の父権社会や父権的宗教団体の中で勝ち取った成功について考えるにあたっては、分析的な視点が要求されるのである。

【参考書目】

『歴代法宝記』『大正蔵』第 51 冊、大正一切経刊行会（東京）、1924-1932。
宋 · 惠洪述、本明編『林間録』『新卍続蔵』第 87 冊、国書刊行会（東京）、1975-1989。
宋 · 暁瑩編『羅湖野録』『新卍続蔵』第 83 冊。
宋 · 暁瑩編『感山雲臥紀譚』『新卍続蔵』第 86 冊。
宋 · 曇秀編『人天宝鑑』『新卍続蔵』第 87 冊。
宋 · 道融編『叢林盛事』『新卍続蔵』第 86 冊。
宋 · 宗杲述『大慧普説』『卍正蔵』第 59 冊、蔵経書院（京都）、1902-1905；新文豊（台北）、1980。
宋 · 宗杲述『大慧普覚禅師語録』『大正蔵』第 47 冊。
宋 · 宗杲述『普覚宗杲禅師語録』『新卍続蔵』第 69 冊。
宋 · 師明編『続刊古尊宿語要』『新卍続蔵』第 68 冊。
宋 · 悟明編『聯灯会要』『新卍続蔵』第 79 冊。
宋 · 正受編『嘉泰普灯録』『新卍続蔵』第 79 冊。
宋 · 正受編『嘉泰普灯録総目録』『新卍続蔵』第 79 冊。
宋 · 普済編『五灯会元』『新卍続蔵』第 80 冊。
宋 · 居簡撰『北**磵**集』『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館（台北）、1986。
宋 · 陳振孫撰『直斎書録解題』 上海古籍出版社（上海）、1987。
宋 · 孫覿撰『鴻慶居士集』『景印文淵閣四庫全書』。
宋 · 孫覿撰『内簡尺牘』『景印文淵閣四庫全書』。
宋 · 梁克家編『淳熙三山志』『景印文淵閣四庫全書』。
元 · 脱脱等編『宋史』『中国学術類編』台北 : 鼎文書局 , 1980。
元 · 念常編『仏祖歴代通載』『大正蔵』第 49 冊。
明 · 無慍述、居頂編『山菴雑録』『新卍続蔵』第 87 冊。
明 · 居頂編『続伝灯録』『大正蔵』第 51 冊。
『続伝灯録目録』『新卍続蔵』第 83 冊。
明 · 文琇編『増集続伝灯録』『新卍続蔵』第 83 冊。
明 · 如惺編『大明高僧伝』『大正蔵』第 50 冊。
明 · 明河編『補続高僧伝』『新卍続蔵』第 77 冊。
明 · 宋奎光編『徑山志』『中国仏寺史志彙刊』第一輯第 31-32 冊、明文書局（台北）、1980-1985。

清 · 厲鶚編『宋詩紀事』 上海古籍出版社（上海）、1983。
清 · 王士禎編『香祖筆記』『景印文淵閣四庫全書』。
日 · 元珍撰『感山雲臥紀譚輯略』 駒澤大学蔵本、1717。

小野玄妙編 1933-1936『仏書解説大辞典』大東出版社（東京）。
駒沢大学図書館編 1962-1964『新纂禅籍目録』駒沢大学図書館（東京）。
昌彼得等編 1974-1976『宋人伝記資料索引』鼎文書局（台北）。
北京大学古文献研究所編 1998『全宋詩』北京大学出版社（北京）。

曹剛華 2006『宋代仏教史籍研究』華東師範大学出版社（上海）。
陳士強 2007『大蔵経総目提要：文史蔵』上海古籍出版社（上海）。
陳垣 2001『中国仏教史籍概論』上海書店出版社（上海）；初版科学出版社（北京）、1955。
程千帆・呉新雷 1991『両宋文学史』上海古籍出版社（上海）。
馮国棟 2014『景徳伝灯録研究』中華書局（北京）。
石井修道 1973「大慧語録の基礎的研究（上）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』31、283-306 頁。
―― 1980「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』38、97-133 頁。
―― 1982「大慧普覚禅師年譜の研究（下）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』40、129-175 頁。
―― 1984「十一種宋代禅門随筆集人名索引（上）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』42、175-126 頁。
―― 1987「『景徳伝灯録』の歴史的性格」『宋代禅宗史の研究』大東出版社（東京）、1-105 頁。
―― 2002「南宋禅をどうとらえるか」『宋代禅宗の社会的影響』山喜房仏書林（東京）、83-156 頁。
―― 2003「宋代禅宗史の特色」『東洋文化』83、153-185 頁。
牧田諦亮 1955「宋代における仏教史学の発展」『印度学仏教学研究』3-2 、631-633 頁。
椎名宏雄 1982「宋元版禅籍研究（六）羅湖野録・感山雲臥紀談」『印度学仏教学研究』31-1、286-289 頁。
―― 2016『綱要・清規』『五山版中国禅籍叢刊』第五巻、臨川書店（京都）。

柳田聖山 1974「禅籍解題」『禅家語録』筑摩書房（東京）。
柳田聖山・椎名宏雄 1999-2001『禅学典籍叢刊』第四巻、臨川書店（京都）。
張超 2015「唐宋禅宗文学婆子形象之比較研究」『仏教思想与当代応用』宗教文化出版社（北京）。
張暉 1993『宋代筆記研究』華中師範大学出版社（武昌）。
朱剛・候体健編 2017『宋代文学評論 第二輯 筆記研究専輯』中国社会科学出版社（北京）。

de Weerdt, Hilde. 2015. *Information, Territory, and Networks: The Crisis and Maintenance of Empire in Song China*. Cambridge, MA : Harvard University Asia Center.

Fu Dawei. 2007. "The Flourishing of Biji or Pen-Notes Texts and its Relations to History of Knowledge in Song China." *Extrême-Orient Extrême-Occident*, Hors série: 103-130.

Hsieh, Ding-Hwa E. 1999. "Images of women in Ch'an Buddhist Literature of the Sung Period." In Gregory, Peter N. & Getz, Jr. Daniel A., eds., *Buddhism in the Sung* (Honolulu: University of Hawai'i Press), pp. 148-187.

Jan Yun-hua. 1964. "Buddhist Historiography in Sung China." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 114.2 (1964): 360-381.

Levering, Miriam. 1982. "The Dragon Girl and the Abbess of Mo-shan: Gender and Status in the Ch'an Buddhist Tradition." *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 5.1 (1982): 19-36.

——. 1992. "Lin-chi (Rinzai) Ch'an and Gender: The Rhetoric of Equality and the Rhetoric of Heroism." In Jose Ignaci Cabezon, ed., *Buddhism, Sexuality, and Gender* (Delhi : Sri Satguru), pp. 137-156.

Welter, Albert. 2004. "Lineage and Context in the Patriarch's Hall Collection and the Transmission of the Lamps." In Steven Heine & Dale S. Wright, eds., *The Zen Canon: Understanding the Classic Texts* (New York: Oxford University Press), pp. 137-180.

——. 2006. *Monks, Ruler, and Literati: The Political Ascendancy of Chan Buddhism*. New York: Oxford University Press.

Zhang, Chao. 2015. "Aperçu sur les *biji* ou les miscellanées du bouddhisme Chan." *Études chinoises* 34.1 (2015): 105-132.

——. 2017. “Chan Miscellanea and the Shaping of the Religious Lineage of Chinese Buddhism under the Song.” *Journal of the International College for Postgraduate Buddhist Studies* 21 (2017): 134-195.

【注】

1　この中の１、２、５、６、７、８、９が「七部書」と呼ばれている。この一覧と作品の詳細な紹介については、拙稿、Chao Zhang, “Aperçu sur les *biji* ou les miscellanées du bouddhisme Chan」を参照されたい。

2　筆記一覧の中の２、３、５、７、８の編集者が大慧派である。

3　椎名宏雄「宋元版禅籍研究（六）羅湖野録・感山雲臥紀談」並びに『禅学典籍叢刊』と『五山版中国禅籍叢刊』の中の『林間録』等の五作品の解題を参照。また、陳士強『大蔵経総目提要―文史蔵』第二冊、561-604 頁も参照されたい。

4　関連する研究については、拙稿、Chao Zhang, “Aperçu sur les *biji* ou les miscellanées du bouddhisme Chan,” pp. 108-109、注 6 を参照。

5　宋 · 惠洪集・本明編『林間録』「序」、245 頁上。

6　同上。

7　宋 · 暁瑩編『羅湖野録』「跋」、396 頁中。宋 · 曇秀編『人天宝鑑』「序」、1 頁中。

8　宋代の仏教史書の発展については、陳垣『中国仏教史籍概論』77-89 頁, 94-124。牧田諦亮「宋代における仏教史学の發展」、Jan Yun-hua, “Buddhist Historiography in Sung China”、曹剛華『宋代仏教史籍研究』を参照。

9　宋代の禅宗灯史の発展については、石井修道「『景徳伝灯録』の歴史的性格」、同「南宋禅をどうとらえるか」、同「宋代禅宗史の特色」、Albert Welter, “Lineage and Context in the Patriarch’s Hall Collection and the Transmission of the Lamps”; *Monks, Ruler, and Literati*.、馮国棟『景徳伝灯録研究』を参照。

10　宋代の文人筆記の全体については、見張暉『宋代筆記研究』、Fu Dawei, “The Flourishing of Biji or Pen-Notes Texts and its Relations to History of Knowledge in Song China”、Hilde de Weerdt, *Information, Territory, and Networks*, pp. 281-426、朱剛・候体健編『宋代文学評論 第二輯 筆記研究専輯』を参照。

11　宋 · 道融編『叢林盛事』「序」、685 頁上。明 · 無慍述・居頂編『山菴雑録』

「序」、114 頁上。

12　暁瑩の筆記が扱う人は宋代が中心であるが、『林間録』は三国から北宋に至る非常に長い期間にわたっている。後代の筆記は、中古の人を含む『人天宝鑑』を除けば、記述対象は宋元時代に集中している。筆記の内容についても、暁瑩の作品は主に他人の言行や事跡によって構成されているが、「史料筆記」に属する『林間録』は、その内容がもっと多様で、作者恵洪の経典の解説や自身の経歴を少なからず含んでいる。後代では、明代の名僧、無慍の『山菴雑録』が主観的な感想や主張を比較的多く含んでいるのを除けば、その他は他人の言行を記録することが主である。

13　明 · 居頂編『続伝灯録』巻三、685 頁。

14　明 · 文琇編『増集続伝灯録』巻六、351 頁。明 · 如惺編『大明高僧伝』巻八、933 頁。

15　宋 · 居簡撰『北磵集』巻十、167 頁。

16　宋 · 暁瑩編『感山雲臥紀譚』「書」684 頁。

17　柳田聖山「禅籍解題」195、488 頁。

18　椎名宏雄編『綱要・清規』633 頁。

19　宋 · 暁瑩編『感山雲臥紀譚』「書」684 頁。

20　宋 · 道融編『叢林盛事』巻二、706 頁。元 · 脱脱等編『宋史』巻三九二、「趙汝愚」11982-11983 頁。宋 · 梁克家編『淳熙三山志』巻二十二、25 頁。

21　元 · 念常編『仏祖歴代通載』巻二十、688 頁。

22　小野玄妙編『仏書解説大辞典』巻一、231 頁。

23　柳田聖山「禅籍解題」195、488 頁。

24　椎名宏雄編『綱要・清規』633 頁。石井修道「十一種宋代禅門随筆集人名索引（上）」175 頁。

25　陳士強『大蔵経総目提要―文史蔵』第二冊、580-581 頁。

26　元 · 脱脱等編『宋史』巻三十五「孝宗」691 頁。

27　宋 · 暁瑩編『感山雲臥紀譚』巻一、670 頁中。

28　宋 · 普済編『五灯会元』巻二十、435 頁。

29　石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」132 頁。

30　明 · 文琇編『増集続伝灯録』巻一、273 頁上。

31　宋 · 暁瑩編『羅湖野録』「序」375 頁上。

32　宋 · 暁瑩編『感山雲臥紀譚』「序」659 頁上。

33　宋 · 曇秀編『人天宝鑑』16、6、21 頁。

34　この図は現存しないが、日本の元珍注『感山雲臥紀談輯略』の中で作成されている。日本・元珍撰『感山雲臥紀談輯略』巻坤下「書」24 頁。

35　ホームページ『全国漢籍データベース　四庫提要』、http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/ShikoTeiyo/0302301.html（2018.07.23 検索）。

36　宋・暁瑩編『感山雲臥紀譚』「書」680 頁下、684 頁。

37　北京大学古文献研究所編『全宋詩』第三十二冊、20575-20582 頁。

38　宋・暁瑩編『感山雲臥紀譚』「書」680 頁下。

39　宋・道融編『叢林盛事』巻二、706 頁下。『大慧広録』及び宋代に入蔵された大慧語録の構成については、石井修道「大慧語録の基礎的研究（上）」を参照。

40　宋・師明編『続刊古尊宿語要』巻五、477-479 頁。

41　宋・普済編『五灯会元』巻二十、424 頁下。明・居頂編『続伝灯録』巻三十三、700 頁中。

42　暁瑩は自分が妙総の伝記を書いた理由を説明して、彼女を達磨の肉を得たと伝えられる尼総持に擬えている。宋・暁瑩編『感山雲臥紀譚』「書」684 頁上に「至於収無著者、蓋依彷達磨伝載尼総持、在於無著、則不忝耳」とある。なお、尼総持については、『歴代法宝記』181 頁上も参照。

43　Hsieh, Ding-Hwa E., “Images of women in Ch’an Buddhist Literature of the Sung Period,” pp. 162-166.

44　宋・悟明編『聯灯会要』巻十八、156-157 頁。宋・正受編『嘉泰普灯録』巻十八、405 頁。宋・普済編『五灯会元』巻二十、427-428 頁。石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」102-103 頁。宋・宗杲述『大慧普説』巻三、907 頁。宋・曇秀編『人天宝鑑』21 頁。明・宋奎光編『徑山志』巻三、330 頁。

45　清・厲鶚編『宋詩紀事』巻九十四、2274 頁。

46　宋・暁瑩編『感山雲臥紀譚』「序」659 頁上。

47　昌彼得等編『宋人伝記資料索引』第三冊、1913 頁。宋・陳振孫撰『直斎書録解題』巻十七、527 頁。ホームページ『全国漢籍データベース　四庫提要　』、http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/ShikoTeiyo/0330401.html（2018.07.23 検索）。

48　程千帆・呉新雷『両宋文学史』543 頁。

49　清・王士禎編『香祖筆記』巻六、24 頁。

50　宋・孫覿撰『鴻慶居士集』巻二十九、290-297 頁、巻三十、302 頁、巻

三十二、325-329 頁、331-333 頁、巻四十二、464-466 頁。宋・孫覿撰『内簡尺牘』巻十、575-576 頁。明・明河編『補続高僧伝』巻十一、444 頁。孫覿と大慧の交際については、石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」123 頁を参照。

51　石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」129 頁。

52　宋・孫覿撰『鴻慶居士集』「序」1 頁。

53　宋・曉瑩編『感山雲臥紀譚』巻一、667 頁下。

54　駒沢大学図書館編『新纂禅籍目録』54 頁、496 頁。椎名宏雄「宋元版禅籍研究（六）羅湖野録・感山雲臥紀談」、同『綱要・清規』633-635 頁。

55　この文章は宋代にあっては筆記の前に置かれていたようである。『叢林盛事』の作者、道融は、1197 年の「自序」の中で「瞌睡之餘、信手抽骨董箱、得江西瑩公所著羅湖野録一帙。及開卷、首乃無著師之為序引」と記している（宋・道融編『叢林盛事』「序」685 頁上）。

56　石井修道「十一種宋代禅門随筆集人名索引（上）」175 頁。椎名宏雄『綱要・清規』627-630 頁 .

57　詳しくは次の拙稿を参照されたい。Chao Zhang, “Chan Miscellanea and the Shaping of the Religious Lineage of Chinese Buddhism under the Song.”

58　Hsieh, “Images of women in Ch’an Buddhist Literature of the Sung Period,” p. 156。

59　「俞道婆」については、次の拙稿を参照。張超「唐宋禅宗文学婆子形象之比較研究」。

60　宋・曉瑩編『羅湖野録』巻一、375-376 頁。宋・正受編『嘉泰普灯録』巻十、351-352 頁。

61　宋・曉瑩編『感山雲臥紀譚』巻二、671 頁下。宋・正受編『嘉泰普灯録』巻九、346 頁上。

62　宋・宗杲述『大慧普覚禅師語録』巻二十九、934-935 頁「答劉季高」。石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」111 頁、113 頁、127 頁。

63　宋・曉瑩編『感山雲臥紀譚』巻二、673 頁上。

64　同上、675 頁上。

65　石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」111 頁、「大慧普覚禅師年譜の研究（下）」149 頁。

66　石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（中）」129 頁。『続伝灯録目録』巻三、29 頁上。

67　宋・宗杲述『普覚宗杲禅師語録』巻二、646 頁上「幻住道人画像讃」。

68　次の論考を参照。Miriam Levering, “The Dragon Girl and the Abbess of Mo-shan,” pp. 24-27. Hsieh, “Images of women in Ch’an Buddhist Literature of the Sung Period,” pp. 151-153.

69　宋·正受編『嘉泰普灯録総目録』巻二、283 頁中。

70　石井修道「大慧普覚禅師年譜の研究（下）」173-175 頁。

71　この女性の法嗣三人は、それぞれ覚庵道人祖氏と、令人本明と成都府范県君である。宋·正受編『嘉泰普灯録総目録』巻二、281 頁下を参照。

72　Levering は、宋代の禅宗では女性の禅師たちを「大丈夫」「丈夫」等の男性的な語彙で描写していたことについて論じている。次の論考を参照。Levering, “Lin-chi (Rinzai) Ch’an and Gender”.

73　宋·曉瑩編『感山雲臥紀譚』巻二、671 頁下。